

「命のきずな」

岡山県 正眼寺住職 しょうげんじ
土本公祥 つちもとこうしょう

今日は、5才になる次男のことをお話しします。次男は、2歳の時に1型糖尿病を発症しました。1型糖尿病とは、自己免疫の異常で正常な細胞を攻撃してしまい、ある日突然発症する国指定の難病です。

忘れもしません。あの日、お昼まで元気に遊んでいた次男が、夕方になってからダラダラ寝転ぶようになり、のどが渇くのか水分ばかり取り、調子が悪くなりました。早く寝かせたのですが、夜中にも水分をとり続け、多尿となり、あきらかにおかしい状態でした。翌朝、病院につれて行き血糖値を調べると、なんと計測不能の高さで集中治療室へ運ばれて行きました。私は、「これからどうなってしまうのだろうか?」「このまま息子は治らず、もしかしたら死んでしまうのではないだろうか?」などと悪いことばかり考えてしまいました。私は気持ちが落ち込み、途方に暮れましたが、妻は気丈にできばきと入院の準備を進めてくれました。

それからしばらくして、次男の容態が落ち着き、幸いにも3日で集中治療室から出られました。その後、私と妻は交代で毎日24時間付きそつことになりましたので、小学2年生の長男にも、これからは、身の回りのことは自分でするようにと言いつ聞かせました。家族が一つになり、懸命に次男の病気に立ち向かいました。おかげで、1ヶ月後には、退院することができました。しかし、私は「この子は、これから一生、血糖値と付き合うことになる・・・」と一番大変な時に弱音を吐いてしまいました。すると妻が「何を言っているのよ。糖尿病になってしまったのは、どうしようもないじゃない。それよりも、これから家族3人でこの子をちゃんと支えて行くことが大事ではないの!」と言いました。

大本山永平寺を開かれた道元禅師さまは、「真に相手を思いやる言葉「愛語」には大きな力があり、時に人生を変える力もある」とお示しです私にとっての「愛語」は、妻の一言でした。次男の「命」を守ることによって、家族の絆が、より一層深まったように思います。